

橋川報告へのコメント

草生久嗣

橋川報告は、ビザンツ精神の源流であり多方面で大きな影響力を残すヨアネス・クリュストモスを、教会理念政治上の改革者としてとりあげ、アタナシオス1世との比較を試みている。これは両者の間に横たわる900年間のビザンツ精神史を全体としてとらえ、その中に確かにあった改革エネルギーの発露を指摘することで、静態的と捉えられがちなビザンツ像理解への一石を投じたものと評価できる。そこで評者は本報告に刺激された形で、この報告へのコメントの機会をビザンツ帝国における教会改革（reform）とは何かを問い直す好機ととらえ、西欧中世史の専門家が集うES研の場を借りて、いささかおおざっぱながら付帯的な議論の提示してみたい。

西ヨーロッパの歴史学界で育まれた分析概念のなかには、しばしばビザンツ世界の分析に用いにくいものがある。たとえば「大学」、「異端」、「靈性」、「民衆運動」など、ビザンツに置くととたんに機能不全に陥る。このことは、しばしば基本的なところで西欧中世史とビザンツ史の構造的にコミュニケーション不全を引き起こす原因となっており、評者は「改革」もまたその列に加えられるのではないかと考える。

西ヨーロッパ中世での「改革」といえば、M.パリスが言うように宗教的な問題に特化して用いられるほど、中世教会問題についての最重要のトピックである。しかしビザンツには「宗教改革」に類する議論がない。西欧的分析枠にことよせてビザンツの事例を改革運動として解釈するビザンツ学者の業績もいくつか見られるが、それらはいずれも研究者それぞれの提言にとどまり、諸現象を束ねる時代精神として捉えられていない。ビザンツ学のリーダーの一人、オックスフォードのA. Cameronはその総括的ビザンツ論 *The Byzantines* (2006)において、ビザンツにはグレゴリウス改革のようなものは無かったとわざわざ強調する。また国際的に最高水準の執筆者を招集して編集された *The Oxford Dictionary of Byzantium* の全文テキストに reform という言葉は、行政区画や軍事組織、官職や徴税システムの変更について文字通りの「改変」として用いられるばかりで、中世歴史用語として用いられる気配がないのである。

この理由として、中世西欧学での改革概念における以下のような特徴が、同じ「改革」の言葉のビザンツへの安易な適用を警戒せしめているためと考える。まず「聖」なる教皇・総主教権力とその周辺の王侯・皇帝が代表する「俗」な部分が二項対立させられている。シモニアやニコライティズムなどが「異端」となって問題視されるように、倫理違反の問題を「異端」と論じきるレトリックがみられ、今そこにある問題としての腐敗や墮落を超克し、「あるべき教会の姿」への回帰をはたすことが「改革」の目的とされる。成功した「改革」の前後は非連続なものとされ、言説上、その変革前からあったはずの諸状態は、その後の展開の「萌芽」と読みかえられやすい。変革後の諸状態は常に積極的な価値をもって喧伝され、頓挫した改革や失敗した改革は「改革」論として取り上げられない。そして同時代的のほかの現象、たとえば西欧托鉢修道会の発生も、民衆異端の誕生も、十字軍の召集も、東西教会の合同争議も、同時代の「改革」に対する原因となりあるいは結果となって理解される。

以上のように中世学上の「改革」論を整理できるとすれば、評者はそのビザンツ論への適応は困難であろうと考える。聖俗両権論の不在は言うまでもなく、およそシモニアもニコライティズ

ムも、認可を前提とした修道会も論じられず、「改革」論議で取りざたされるさまざまな事件・現象もビザンツにとっては、帝国最末期のそれを除いた東西教会の合同争議に至るまで、西欧を含む外部からの働きかけによって否応なく問題視されるに至った代物ばかりであった。そしてその解決は必ずしも目覚しい成果をあげないのである。

むしろビザンツ史においては、「改革」に類する表現として英国学会が提唱した（Spring Symposium of Byzantine Studies (26th : 1992 : Saint Andrews, Scotland)）ように「刷新」「修復」「再検討」といった言い方のほうがふさわしいのではないか。こうした動向は単に reform 的枠組みを拒否するだけの後退的なものではなく、ビザンツ世界の特性を垣間見せるものにとらえることもできるのではないだろうか。すなわちビザンツにあっては現ローマ皇帝と大教会が支える「現在」を必ず肯定し、常に古代末期の大帝たちの「再来」と目されるような優れた皇帝の教会によって維持されているとする。現状に倫理的腐敗や制度上の混乱を見出して「未来」におけるその克服を期する西欧型改革精神とは、方向性を異にしている。ビザンツの本体は断絶なく刷新されてゆくものであり、そこでは、多少のほころびも逸脱も多様性も、そのまま塗りこめていくかたちで理念的な同一性を維持していたのである。

\*

以上のような仮説的な提題を行った上で、コメンテーターとして評者は、橋川氏の「改革」概念の使用妥当性について質問した。はたして、アタナシウスやクリュソストモスの改革と言う場合、グレゴリウス改革史観的な束縛を受けてはいはしないか。もしそれから自由であるとすれば、ビザンツ的教会改革の特性とは何であるといえるか、と。一方、研究会参加者に対しては、専門を異にする評者が西欧型・グレゴリウス改革史観について、いささか乱暴に過ぎる定式化を行っている自覚を表白したうえで、専門家からの是正を伴ったコメントを仰いだ。

橋川氏はその問いかけに対し、「グレゴリウス改革」的であるかどうかは別として、アタナシウスやクリュソストモスに改革者としてのカリスマを認めることは可能であり、一概に言葉としての「改革」を放棄するにはあたらない。研究それ自体が端緒についた段階であることから、すべてに及ぶ回答はできないが、改革を比較していくという本報告の議論は今後とも展開していく用意があることを表明された。また研究会参加者からは、研究の発展により評者がイメージしたような改革史観はもはや旧に属し、すでに距離感もある旨の表明があった。かつてわが国の西洋中世学にあつて隆盛した教会改革論は、現在にいたるまでなお一元化された理解をされておらず、便宜上「改革の時代」などと状況を呼び習わすことはあるにしても、実態においてはいわゆる定式的なグレゴリウス改革史観に沿わない現実も多いとコメントを得た。さらに、すでに時代背景としての教会改革に立脚しないテーマ・フィールドのあることも紹介をうけた。